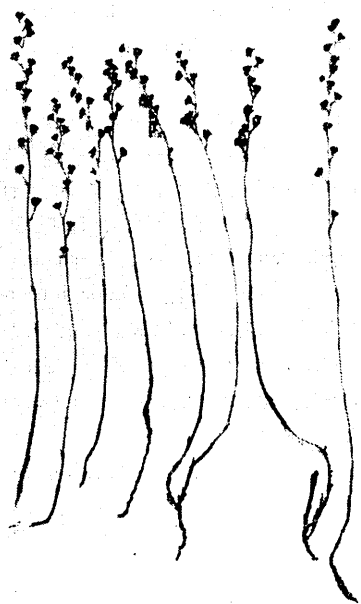


児郡可児町久々利 (Jul. 27, 1903, 桜井半二郎) を始め、愛知県旭町八幡神社、長井坂 (大原準之助)、京都市左京区久多町 (1954, 赤坂時之・田村道夫)、福井県永平寺 (1954, 若杉孝生)、奄美大島 (1934, 正宗敬敏) などが知られ、最近では石川県江沼郡山中町富士塚ヶ岳 (1975, 九富修) から報告され、ここが北限産地となった。このうち岐阜県可児町浅間山 (標高 392m) の自生地は、天然記念物に指定し保護している。

今回筆者らの発見地は石川県より緯度的には南に当るが、岐阜県可児町からは直線距離にして約150km東北方の位置にあり、サクライソウの分布域がさらに拡大されたことになる。

生育地は、通称キノヒノキと呼ばれる推定年代 250

年のヒノキを主とした天然林 (三殿営林署資料) に続く雑木林の林床であった。この雑木林は、過去に天然林が伐採されその後放置されたままらしく、低木層はリュウブ、ネズ、ネジキなどの密生したブッシュが繁り下草は

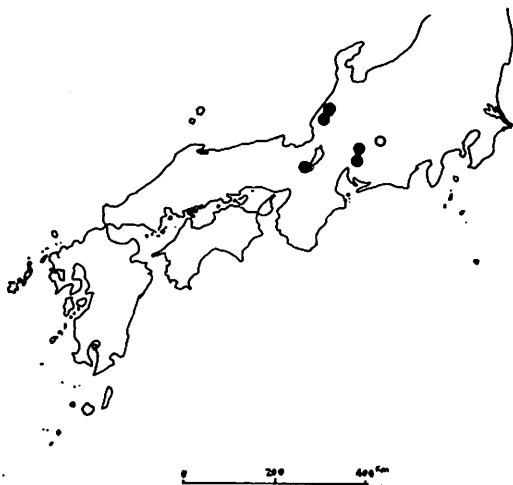


サクライソウ (*Protolirion sakuraii*)
木曾郡南木曾町柿其 (かきざれ) にて
1976 年 10 月 20 日 橋渡勝也採集。

殆んどなく、高木層には樹高約15mのモミが点々としていた。サクライソウは、この林の尾根付近の割合に乾燥した場所に点在し、尾根をはずれると全く見ることができなかった。

[植物ニュース] (17) シロバナタンポポ *Taraxacum albidum* Dahlst. 帰化植物とは、外国産の植物が何らかの人為的な作用を通して侵入野生化したものと定義される。しかし、植物自身に国籍があるわけではないから、帰化植物の本当の意味は、人間の活動によって本来の分布図を逸脱野生化した植物ということにある。そうすると、こんな植物は国内にもあるのではなからうか。帰化という人間本位の言葉の意味からは矛盾はあるものの、私はこんな植物を国内帰化植物とよ

南木曾町柿其と岐阜県浅間山の自生地とは、植生がよく類似しているようで、今後さらに植物社会学的な調査も行ない、比較検討を試みるとともに何らかの保護対策を考えたい。また、岐阜県浅間山では、サクライソウに伴って、ホンゴウソウも発見されており、両種は生態的にも類似の環境に生えるので今後南木曾町柿其でも発見が期待できそうである。



サクライソウ (*Protolirion sakuraii*) の分布
○は南木曾町柿其の新産地

2. バケヌカボ

Agrostis × *dimorpholemma* Ohwi

コスカグサ × *Agrostis* sp. の雑種起源と考えられる種で、箱根産にもつぎ大井次郎氏が記載した。

本種は外穎が有芒で包穎より超出する小花と無芒の小花が同一花序に混存する特異な種であるが、概形はコスカグサに似ている。邦産 *Agrostis* で有芒小花をつけるものには裏日本の深山に生ずるユキクラスカボ、高山生のミヤマスカボ・コミヤマスカボ、帰化植物のヒメスカボ (芒は苞穎の外へは超出しない) があり、いずれの種も分布的にかけ離れており、バケヌカボの片親を追求することは困難である。

同定していただいた国立科学博物館、館岡亜緒氏に厚くお礼申し上げる。

び、これも人間活動の指標になるだろうと述べたことがある (日本生態学会中部地区甲信越 亜区大会, 1973)。

ところで、シロバナタンポポの固有の分布域は県内では飯田以南や木曾地方南部とみられる。しかし、諏訪や松本や長野でも時どきみることができる。白花という珍らしさから移植され、野生化したものと思われるが、これは国内帰化植物のよい例ではないかと思っている。 (清水建美)